

談話室

沖縄秋期大会を振り返って ～メンソーレウチナー～

2011年秋期大会実行委員会委員
東北大学教授；大学院工学研究科

原 信義*

2011年秋期大会実行委員会委員
東北大学教授；大学院工学研究科

小池 淳一

2011年秋期大会実行委員会委員
東北大学准教授；大学院環境科学研究科

吉見 享祐

1. 沖縄秋期大会を振り返って

2011年金属学会秋期大会は11月7日(月)～9日(水)の3日間、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンター(7会場)およびカルチャーリゾートフェストーン(6会場)の13会場(図1)で開催された。開催に至るまでには、分科会および講演大会委員会において3年間にわたる議論を行い、多くの貴重なご意見をいただいた。この間に分科会委員長および講演大会委員長をされた毛利哲雄北大教授、津崎兼彰物材機構センター長、新家光雄東北大学金研所長ならびに分科会委員・講演大会委員の皆様には心より感謝申し上げます。また東北大の実行委員会委員の皆様にも厚く御礼申し上げます。

発表件数は1,497件で2003年の北海道大学に次ぐ歴代2位の多さであり、また参加登録者数は1,890名に上り、こちらも昨年の参加者数を大幅に上回る多さであり、大盛会であったと言える。

今回の講演大会は東北地区開催の番であったが、沖縄での開催を企画することにした。すなわち、通常であれば当番地区にある大学の施設等を利用するところを、あえて地区外でしかも大学以外の施設で開催することにしたのである。第117回のハワイ大会(1995年秋期)⁽¹⁾を除き、149回を数える日本金属学会の講演大会史上、初の試みである。その主要な目的は、(1)第4期科学技術基本計画に対応できる講演大会の試行、(2)近年参加者および発表件数ともに減少傾向にあった講演大会の活性化、(3)実行委員の開催負担の軽減である。第1と第2の目的は次の新しい講演大会の試行の項で詳述

するのでここでは詳細な記述は割愛する。第3の負担軽減に関しては、材料系の教員が少ない地区・大学が当番になっても講演大会ができることを立証することでもある。この目的を実現のための大きなポイントは、必要な数の会議室とサポート体制の整った施設、例えばコンベンションセンターの利用と、旅行代理店の全面的な協力を得ることであった。もちろん、支出を学会の財政基盤を脅かさない範囲内に抑えなければならないので、コンベンションの利用に関してはその点も重視して沖縄コンベンションセンターおよび隣接するカルチャーリゾートフェストーンを選択することになった。旅行代理店の利用に関しては、近畿日本ツーリストに本業の宿泊・航空券セットプランの手配のみならず、Webを利用した事前参加登録業務、那覇市内から会場までのシャトルバスの運行等を一手に引き受けて頂いた。

大会の実行委員会は東北大学の教員16名のみの少人数で構成した。筆者を含め大部分は比較的年配の教授であり、今回の試みの趣旨(少人数対応)から若い先生方にはあえてお手伝いをお願いしなかった。結果は、少人数で十分に対応できたと思っている。今回のような開催方式の最大のメリットは、実行委員会の負荷が小さいことである。したがって、例えば、日本金属学会員の少ない支部・地区、材料系の教員が少ない大学に担当していただくことも可能であろう。今回の試みに関する最終的な結論を得るためには、講演会の中身(大会活性化の試み)に関する総括、アンケート調査の結果、収支決算報告を待つ必要があるが、主要な目的は達成できたのではないかと考えている。

台風シーズンを避けての開催日程設定であり、予定通り大会の前半の天候はまずまずであった。青空の下で南国の雰囲気を感じられた方も多かったことと思う。残念ながら、2日目夜の懇親会の頃から雨が振り出し、最終日の3日目は雨脚が強まり、文字通り水をさされた形になったが、郷土料理や泡盛に舌鼓を打ちながら沖縄の夜を満喫された方は多かったのではないと思われる。なお懇親会については後で詳述する。第2日目昼近くの講演の最中に、マグニチュード6.8、最大震度4の地震があり、海に隣接することから一瞬ヒヤリとする場面があった。沖縄では大変珍しいことだそうで、「東北の実行委員が地震まで引き連れてきたか」と言われてもおかしくなかったが、全国的に地震慣れしているようで、そんな冗談は聞こえてこなかった。今年はどこまでも地震の話題がつきまとうが、ともあれ、東日本大震災を乗り越えて、講演大会を沖縄の地で盛大に再開出来たのは、本会の復興を示す良い証ではないだろうか。

(文責 原 信義)

文 献

- (1) 鈴木朝夫, あたりあ, 35(1996), 285-292.



図1 沖縄コンベンションセンター(左)とカルチャーリゾートフェストーン(右).

2. 新しい講演大会の試行に向けて

〈対応基本方針〉

第1の目的である第4期科学技術基本計画対応を見える形にするために、セッションの大きくくり化を検討した。このことは、周辺分野の講演を聞くことで、自らの研究に新しい切り口のヒントを得てもらい、かつ各自の研究分野の拡大につなげてほしいとの願望もあった。また、分野横断の研究討論を活性化するために、ポスターセッションを充実・拡大することも検討した。第2の目的である参加者数・発表件数増加のために、観光地として人気のある沖縄を開催地として選択し、従来とは全く異なる場所と雰囲気の中で開催することによって、種々の新しい試みを行い、学会を活性化させるための新たな運営指針を模索することとした。また、懇親会の活性化の試みとして、優秀ポスター賞受賞者の懇親会招待や学生参加費の導入により、若手研究者の参加増と世代を超えた交流を狙った。第3の目的である大学開催の場合にかかる担当委員の負担の軽減のため、参加登録システムの導入および旅行代理店の活用を図ることとした。なお沖縄の場合、琉球大学での開催も検討したが受け入れ態勢が整わず断念し、コンベンションセンターでの開催としたが、会場数の制約があり、このことは後述するが、大きくくりセッションの導入や大規模ポスターセッションの成功に繋がった。

〈セッションの大括り化〉

会場数が少ないという物理的制約を逆に利用して、「大括りセッション」を設定した。セッション名は、一般市民が見ても学会が社会に役立つ活動をしていることが理解できるようにと心掛けた。このことは学会の公益法人化にも関わる点である。また、従来のセッションで関連性のあるものを可能な限り一つにまとめて「大括り」とし、同一会場で聴講できるようにすることを狙った。こうすることで各会場での聴講者数が増加し異分野の研究者も交えた活発な意見交換ができたという効果があったようである。会期全体を通じて、殆どの会場には7割以上の聴講者がいたことからしても、大括りにしたことで幅の広い熱心な議論が行われたようである。

〈ポスター発表充実の試行〉

もう一つの大きな試行として、口頭発表件数を減少し、ポスター発表を格段に増加したことである。ここで、本件に関して分科会で議論した内容を紹介しておきたい。まず、概要が非常に短いために、概要の記載内容が情報源として機能していないということが指摘された。同時に、口頭発表の質の低下が指摘された。これらの負の傾向を打開するための方策として、概要を長くしてDVD化を実施することとした。さらに、口頭発表件数を減らして、一件の講演時間を20分程度に延ばすことや、ポスター発表を増加して議論を深めるなどの提案がなされた。結果的には、会場数が少ないという物理的制約も手伝って、ポスター発表の増加を実施することと

なった。講演件数が当初予想を大きく上回ったため、672件ものポスターが展示され、会場は活況を呈した(図2)。ポスターの列毎にセッション名が掲示されていたので、関連ポスターを見つけやすかったと思う。ポスターセッションの課題は、これだけ多数のポスターがあったにもかかわらず、日程の都合上で2時間しかとれなかったことである。また、余談ではあるが、ポスター聴講者の増加と議論の活性化を目的に導入した軽食と飲み物があまり利用されなかった。国際会議では飲み食いしながらの議論は良くある光景だが、提供場所が目立たなかったことに加えて、金属学会では皆さんが遠慮していたようである。



図2 ポスター発表の様子。

〈参加者数の増加〉

沖縄大会は講演発表件数と参加者数が、それぞれ昨年の大会と比較して大幅に増加した。会場の関係から、今回は鉄鋼協会との共同開催ではなく、金属学会の単独開催であったことを勘案すると、この数字は大成功と言える。このことは、魅力的な場所を会場とすることによって講演大会への参加を促すことができることを示唆している。プログラム編成にあたっては各セッションの過去の参加人数を参考にして会場を割り振り、会場の移動を極力避けるために、公募シンポジウムをフェストーネにまとめ、一般講演をコンベンションセンターとした。しかし、二つの会場を何度も移動された方々には不便をおかけした。また、座席数を確保するため全講演会場レイアウトを従来のスクール形式からシアター形式で行ったが、コンベンションセンターの一部の会場とフェストーネのほぼ全会場で席数が不足がちであったことも問題であった。1000人を超える学会で全てを満足するコンベンションセンターを国内に見つけるのは困難なようだ。

〈担当委員の負担軽減〉

今回は東北地区が担当させていただいたので、会場の様子などを把握するために、学会事務局ならびに担当委員が、総じて3回の現地視察および業者との打合せを行った。コンベンションセンターの担当者が、あらゆる情報提供と打合せの段取りをして下さったため、効率よく行うことができ、その後は電話でのやりとりで十分であった。また、ポスターボードの設置を始めとして殆どの設備関係は専門業者によってなされた。大学会場の場合、教員と学生による労働提供が

必要なことを考えると、全体を通じて負担軽減効果は大きかったという印象である。

〈その他〉

コンベンションセンターの担当の方々を始め、あらゆる場所で触れ合う人々の優しさと暖かさを実感する機会が多かった。また、沖縄独特の食文化も堪能し、非常に楽しく過ごすことができた。一方で、会場の往復途上でみた米軍基地や地位協定問題など、沖縄が抱える課題も垣間見た。なぜ講演大会を地方で開催するのかという質問があるとすれば、日本の地方の美しさと特徴を知ることが研究者として必要だと回答したい。

(文責 小池淳一)

3. 懇親会を振り返って

沖縄大会懇親会は、大会2日目の11月8日、午後6時30分より開催された。会場は、那覇市内にあるロワジールホテル&スパタワー那覇で、参加者数は総勢269名であった。当初懇親会場としてプールサイドを予定していたが、残念ながら沖縄の秋の空にすねられ雨天となったため、急遽、各賞贈呈式会場として押さえていた屋内会場と、プールサイド脇のレストラン、そしてプールサイドに一部テントを張っての開催となった。今回の懇親会は、南国沖縄の風情を少しでも堪能できるようにと屋外企画を練ってきただけに、雨天とそれによる会場の分散はたいへん残念であったが、終わってみればそれもまた一興と、参加いただいた会員皆様には好評だったようである。

参加者の内訳は、事前申込をいただいた数が134名、当日申込が60名、招待者75名(大韓金属・材料学会会長、各賞受賞者等、うち今回はポスター賞受賞者が25名も含む)であった。特に今回は学生、若手研究者会員の皆様の参加が多く、年齢層の分布がかなり均等となった。そのことで世代を超えた交流が生まれ、大いに活況を帯びた感があった。本来ならば、この場で何故学生、若手研究者会員の皆様の参加が増えたのかを分析しなければならないところであるが、実のところ未だに謎である。

今回は飲み物の提供に工夫を凝らし、泡盛メーカーである神村酒造に泡盛ブースを出していただいた。このブースでは、神村酒造が作る数種類の泡盛を飲み放題で楽しめたほか、ハイボールならぬ暖ボール(神村酒造の泡盛「暖流」で作ったハイボール)も振る舞われ、ブース前にはちょっとした列ができていた。さらに泡盛の利き酒コーナーもあり、筆者が覗いたところ、案外、全問正解の方々がいらっしたことには驚いたのを記憶している。地産のお酒をしかも酒造メーカーのウンチク付きでいただくというのは、懇親会に参加



図3 南国ムードに包まれた三線ライブ。

する者にとってこの上ない楽しみであった。加えて今回は、沖縄コンベンションビューローから、三線による歌謡(図3)とエイサー(沖縄民族舞踊)を無料で派遣いただいた。三線でしっとりとした雰囲気が出来上がった後に、エイサーの力強い掛け声と踊りで魅了され、舞台に釘付けになった方々も大勢いらっしまった。通常の懇親会に比べてアトラクションの充実が、今回の懇親会を盛り上げてくれた一因であったことは言うまでもない。惜しむらくは、会場の分散にもなってお料理も分散したのだが、屋内会場ではあっという間にお料理が無くなってしまいご不便をおかけしたことだ。ご参加いただいた会員の皆様には、深くお詫びする次第である。

会場についてであるが、プールサイドのテントは、雨天とは言え開放感のある作りであり、眼下には港の夜景も望めたこともあって、屋内の懇親会とはまたひと味違った雰囲気が醸し出されていた。懇親会とは言え、とかく知り合い同士で寄り集まってしまいがちだが、プールサイドおよびその脇のレストラン会場では学生や若手研究者会員のみならず、世代と所属がまさにクロスオーバーした交流で、たいへん盛り上がっていたようだ。アウトドアで洒落た会場の設定というのも、参加する私たちの気持ちをより一層リラックスさせてくれる効果があるようだ。たいへん勉強になった。今後の懇親会場選びの参考にしていただければ幸いである。

最後に、懇親会にご参加いただいた会員の皆様におかれては、今回の懇親会の運営に対して様々な感想をお持ちのほうである。それを是非、金属学会事務局にお寄せいただきたい。参加されたほとんどの方が、楽しかったという感想をお持ちのことと願う一方、不手際もあり、反省すべき点は反省しなければならない。お寄せいただいた感想に基づいてしっかりと分析し、今後の懇親会運営に活かしていけば、もっと多くの会員の皆様にお集りいただける懇親会となるはずである。(文責 吉見享祐)

(2011年12月5日受理)

(*連絡先: 〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-02)